研究ノート

木下八重の書簡

――京都看病婦学校卒業生の活躍――

吉　海　直　人
同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

Life and Letters of KINOSHITA Yae

Naoto Yoshikai
Department of Japanese Lanugage and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

【要旨】京都看病婦学校の卒業生の一人である木下八重についての一等資料が見つかった。それは「助産之友」中の「人のかゞみ」項に掲載されていた八重の自筆書簡である。八重の人生及び看護婦としての活躍を知る手掛かりになればと思って、ここにその資料の翻刻を紹介したい。

一

京都看病婦学校を卒業した木下八重をご存知でしょうか。私は平成二十六年三月十一日に行われた同志社女子大学広報課の部課別研修で、京都看病婦学校の卒業生の活躍を取り上げてお話したのですが、その一例としてフランスに派遣された看護婦の中に京都看病婦学校の卒業生がいたことを話題にしました。

彼女のことは、佐伯理一郎著『京都看病婦学校五十年史』の「はしがき」に、

欧州大戦には唯一名而已(のみ)出したるに、それが同行せし赤十字社の看護婦達は皆一人のこらず戦後任期満ちたる時に帰朝を許されしも、彼女ばかりは是非に残し置きくれよと仏国政府よりの切なる願を聞きても、人をして聊(いささか)か世のつねの看護婦と異なる処あるかと思はしむるものなきに非ず。何が異なって居るか？我等も同じ大和民族である。我等もかはらぬ皇室中心主義者である。然らば異なる点は僅(わず)かのものでなくてはならぬ。　（2頁）

と紹介されていたことから、興味を抱きました。佐伯はたった一人の京都看病婦学校卒業生を、同行した日赤の看護婦達と比較していますが、その違い（すばらしさ）は目に見えぬものというか、技術ではなく心のありようだと述べています。佐伯は聖書の言葉である「受くるよりも与ふるは幸福なり」（使徒行伝二十章三十五節）をあげ、これが看護の心だと主張しているのです。

彼女のことは、同じく『京都看病婦学校五十年史』の大正4年の報

告の中に、同志社病院に長く勤務したベリー氏の書状（大正4年8月13日着）として、

扨、木下八重子日本赤十字社の選に當り、佛国へ派遣相成候御通知被下、実に有難く且つ嬉敷存じ候。御校卒業生として欧州戦乱に名誉ある働をなされつつある事は、當人は素より御校の上にも小生迄も誇といたすところに候。　（71頁）

と紹介されていました。ここに「木下八重子」という実名があがっています。この手紙によって、フランスへ派遣された京都看病婦学校の卒業生が木下八重（明治二十九年卒業生）であることがようやく明らかになりました。なんと新島八重・井深八重に続く3人目の「八重」の登場ということになります。不思議な縁ですね。

二

話は変わりますが、平成二十六年五月七日（水曜）の午後十時十分からNHKの歴史秘話ヒストリアで「パリナースたちの戦場～看護婦が見た世界大戦の真実～」が放映されました。御覧になったみなさんは、第一次世界大戦時における日赤看護婦の活躍に感動されたかと思います。そんな中、私は別の視点から食い入るように画面を見つめていました。ひょっとしたら、木下八重のことが今回の番組でも取り上げられるかなと期待していたからです。しかしながら今回は、その時の手記を残していた竹田ハツメさんに焦点が当てられていました。

ところで「パリナース」に関しては、日本赤十字社の事業として行われていたので、派遣されたのは当然日赤の看護婦と思い込んでいました。ところがその中には、日赤以外の看護婦も含まれていたことがわかりました。木下八重はまさにその一人だったのです。彼女のフランスでの活躍が佐伯氏に大いに評価されたこともあって、『京都看病婦学校五十年史』には、

母校の名誉を挙げたる木下八重、竹内修子、不破雄子、東達子（皆天上の人）、　（1頁）

云々と、あの不破ゆうを抜いて卒業生のトップにその名が記されています。こうなると彼女の具体的なフランスでの活躍、さらにその後の活躍など知りたくなりますね。ただし彼女についての詳細はほとんどわかりませんでした。なんとか資料はないものかと思っていたところ、看護学部の岡山寧子先生が社史資料センターに所蔵されている「助産之友」（京都産婆学校同窓会誌）を調査され、その第四巻第三号の「人のかゞみ」という項目に、木下八重の写真入りの記事があることを見つけられました。

この記事は、佐伯理一郎から自らの履歴をまとめるようにとの依頼に応じて、木下八重が書簡にしたためて返送したものです。ですからここにはこれまで知られていなかった個人情報がたくさん含まれています。なお京都産婆学校は京都看病婦学校から派生したものなので、看病婦学校の卒業生のことも同窓会誌に合冊されていました。

これまで木下八重のことはほとんどわかっていませんでした。調べようという人もいなかったようです。それが「助産之友」にまとまって紹介されていたのですから、これは木下八重の生涯を知る上では一等資料ということになります。それだけでなく、明治・大正期における看護婦の活躍、しかも二度の出征体験が記されているのですから、日本の看護史においても貴重な資料ではないでしょうか。

そこで今回、その全文を翻刻・紹介して木下八重を顕彰する次第です。この資料を発見された岡山寧子先生と、資料の閲覧並びに図版の掲載を許可して下さった社史資料センターに心からお礼申し上げます。

【翻刻】木下八重子　　佐伯理一郎

卒業生。三十二年間一日の休みもなく看護及び助産の職を離れない木下八重子さんのような人が幾人ありませようか。年限丈はありませ

う。去り乍、意義ある生活を以つて斯く永く続く人はありますまい。御覧なさい、我が木下さん。英語は申すに及ばず、フランス語も中々御上手で、まだ其の外の他国語にもあれこれと御通じの様に聞いて居ます。

□此の人が我が校の出身であり、常に母校を忘れず、母校の為なら忙しき職業も捐てゝ、一二週間位の事なら喜んで実習を若き妹達に教へに参りましようと云はるゝに至りては、如何に義侠心に富む人格者である乎と云ふことが分りましよう。

左に姉より私当に来れる書翰を揚げます。

久し振りで先日は楽しい集りに出席させて頂きまして、実に嬉しくござりました。特に先生から親しく御話を承りましたが、余り時間が短いので、何だか物足りない心地が致しました。次の集りには一日を緩々と皆様の境遇且つ実験話を承り度と、今より楽しんで待って居ります。

拇指を失ふたる理由

先生が過日仰せ下されました写真、余り立派過ぎて（実物より）恐縮致しますけれども、震災（関東大震災）前に瑞宝章七等の勲章を賜はつたと同時に満五十二歳の齢（大正十一年十一月九日）を記念として撮影した物が幸いにありました故、御笑い草として御送り申します。

今一つ、右の拇指切断原因を大略申し上げます。明治四十二年八月印度人の富豪なる人が日本に漫遊に来まして、其の時折悪しく□部と背部及び腰部とに各一個づゝ、カルブンケル（化膿症）（其の大きさは直径十五、六、仙）が出来て、横浜山手のゼネラル、ホスピタールに入院しましたが、印度の国風に迷信か存じませぬが、身体に刃を樹てて傷つける事は絶対に出来ないから、切開せずに治療して呉れとの望みにて、瑞西の博士が何程説明されても容易に承知せざりしが、同時に糖尿病をも起こし、死に瀕する所まで至りて、漸く印度の友人からいろいろと攻める様に諭し慰めたれば、患者はそれなれば日本医学博士を招き、其の上で覚悟するとまで申し出ました、幸いに東京より佐藤三吉博士の往診を願ひ、後来診ありて、噫々直ちに切開せざれば今晩にも生命危ふし、と申された其の言葉に納得して縦横に大々切開を受けて、生命を救はれました。初めより三ヶ月間にて退院後無事に帰国されました。其の患者入院後四十日余り、昼間は毎一時間に酸素を熱湯に加へ、其の中へ大タオルを浸した物にて蒸湯法（ホット、ホームテーション）を施行する事、私一人にて受け持ち（尤も夜は毎三時に他の人）、熱いのと酸の薬とで指の皮膚を痛め、其の中で他には手術もあり、大多忙と大全速力とで器械の洗ひ方、あと始末の際に縫合針にて刺したる事もありし為、其処より黴菌を受け、終に瘭疽となり甚だしき苦痛を覚へました時に、他の看護婦からモヒ注射（痛み止めのモルヒネ）が許可になりてあると申されましたなれども、其の時こそ天父のある事、救世主イエスキリストの十字架を思ふて、私の指一本位何でもないと忍耐して、とうとう痛みに堪へましたが、全癒

までに二ヶ月余りを要しました。片眼なくなりしより余程幸いであります。少しも不自由を感じませぬ。満足して其の後も我が天職に従事して居ります。

明治二十七年、看病婦学校に入りて以来、今日までに病魔に襲われました事一日もなく、四十年に左手中指に黴菌を受けましたと、此の二度の痛みの試みを受けましたが、其の余は健康体を以って活動させて頂き居ります。実に幸いなる者です。今一つ実験致しました事は、明治四十五年頃から右卵巣に鶏卵大の腫瘍と子宮には数ヶ（八つ頭芋の如く）の筋腫が発生しかけて居りました事を専門医の診察に依って見出されました。其の時一日一、〇〇麦角丸を服用致す事二ヶ月間、其の他何の異常もなく、併し一年後こそ妊娠五ヶ月位の大きさまで発育致したれども、出血も痛みもなく、只月経血は極く少量にて、五十歳まで続きましたが、其の閉止と共に夢の如く収縮して消へ失せました。此の事は専門家が初診の時に注意して下された通りに、手術もせず幸いに救はれました。初診を受けます前の感は硬便の停滞かと思ふて自分でマッサージして通薬を用ゐましたれば、最も明らかにカタマリを触れましたから、専門医に診断を受ける気になりて参りましたと、仏国へ派遣されて行く前に診断を受けたと二度だけで、他に何も其の必要を感じませなんだ位ひの事でありました。幸せ者です。天父は特別に守りて下されつゝあると感謝致して居ります。

昭和二年五月十八日　大幸福者なる　木下八重

追って二十七年以来危険病にはコレラ・ペストに迄接し、日露役の際バルチック艦に出会い、又は朝鮮沖で遭難して救はれ、欧州戦役も海で三度も救はれて居ります。陸でも度々危険な目に会ひました。

第二信

過般学校へ送りました写真、先生の御望みにて無遠慮に送りました次第。次て又履歴様のものを望まれますが、小妹として何も価値ある者でなく、皆様に御恥しき者でございますが、写真の胸に掲げたるものに対する訳けの大略を述べよと先生から申し込まれましたので、具筆を以って申し上げます。皆様の御力に依って御判察願ふ事を前以って申し上げます。

私事我が国の古風に習ひ、十七歳にして木下家へ嫁し、十九歳にして一男、二十三歳にして次男を挙げ、二十四歳にして夫に死に別れ、或る牧師の勧めに依って看護の道に進みました。此の年満二十二歳に近く二ヶ月不足（此の時校則は満二十二歳にて入学許可）なれども、故タルカット先生（イライザ・タルカット　明治二十四年京都看病婦学校教授）の優しき思し召しを以って入学を許されました。

明治二十七年なれども、日本の片田舎にて京都府下舞鶴町などでは看病人に出て行くなれば、再び家に足を踏まぬ積りで出て行けと親類の者達から申されて出京致しましたのに、体格試験には見事に落第（心臓弱き為）致しましたなれども、一ヶ月の仮入学をタルカット先生の御情けに依りて許されました。其の間に何も異状もなく、無事本入学と定まりまして、一安心して其の業を楽しく習ひ進みましたは、先生様方の御尽力一方でなかった事を今に感謝致し居ります。

明治二十七年九月入学、同二十九年卒業、同年内務省産婆試験及第。同廿九年九月十五日、京都府下に暴風雨の為め水害は丹波・丹後に渉り甚だしく、福知山にて死傷者・伝染病者甚だしく、郡部養生看護婦は其の仁に当たりて、足立病院の看護婦もなく、同院も三十人の満員を看護する人なく、幸いに小妹が依頼されまして三ヶ月間労働致しました。

次で明治三十年に京都府立療病院へ実地研究の為め志願して各科を廻らして頂きましたが、其の当時病院内の看護婦は総数四十名余りで、昔の雇い婆々式の中に只二、三名赤十字社を六ヶ月位で卒業した人が有りました。私が志願した頃には新教キリスト教徒は一人も無く、旧

教の人が四名ありました（此の四十名余りの中に私一人新教であります。事務員男子方のお話しに天主教の人等は病室の責任を捨て置きても朝早く教会へ行くが、木下は如何であると申されました。私も病人を放棄して行くのはいけないと答えへましたれば、事務員が同じ宗教でも貴女のは余程異なる所があると認めて呉れ、私の引き番に教会へ行く事を誰も迫害いたしませなんだ）。母校の先輩達がたまに附添として行かれた時に、雇婆さん連中が随分迫害したそうです。其れ故に同窓の先輩諸姉が私に向つて、行く事を中止せよと親切に忠告して下されました。其の時に一人の同級生が其処にこそ行きて神の栄えと母校の栄えを現はして可なりと、勇み勧めて呉れましたので、私も荒野に出で行き勝ちを上げんと進んで参りましたが、案外に親切を以つて種々病院内の規則を教へて下さつた人があります。此の人は自身は仏教信徒なれども、其の娘はケリー先生（初代オーテス・ケーリ　同志社神学校教授）の御世話でキリスト教信徒でありました。其の仏教信徒なる人は、日清戦役に新島八重子夫人、次で我が先輩の同窓生等と従軍された人ですから、キリスト教は信じなくとも我が校出身の者を信じて下さつた訳けです。私に直ちに一等室の副取締を命ぜられまして、不熟なるに大心配して勤めを始めましたが、一事万事を其の院の規則に習ひて勤めつつある間に、日本で模範的の精神病室が七十人入りの加茂川に沿ふた土手上に建築され、其の科に四人の看護人と四人の看護婦を置かれる事になりました。其の当時は百二十人の看護婦が病院に有り、私も一年位ひは研究致し度(た)きと心の中に考へて居りましたなれど、ナカナカ大責任であり、未熟の私にはと秘かに考へて居る間に、其の四人の一人に加へられ、又々副取締りの任に当り、大責任を担ふて勇ましく其の職に進み、日々新しき経験を得つゝ一年過ぎ二年過ぎ二年半となりましたが、御承知通り此の病気は他の看護の如く眼前の働きにあらずして、一分一秒も油断の出来ざる看護にて、非常に薄弱なる頭を使つた其の為め、労れて一事休む事を事務所へ再三願ひ出でましたが、代りの人なきとて許可にならず、二ヵ年半を続いて勤めました。併し神経衰弱を起こしてまで勤続致して居れず、却つて精神病に罹り御迷惑をかけては不本意と決心して此の病院を辞し、直ぐに三十三年の六月、大胆にも外人のみの病院にて横浜へ参りました。扨て私の如き英語に通ぜぬ者が一方ならぬ困難を忍び、努力を以て日々勤務致しましたが、此処に有難き点は母校の先生方の御教へ、即ち内外人に適順する実地を習ひ得てありし為め、外国人に対する実地に少しも躊躇する所なく勤め働く事が出来まして、今更の如く恩師の御蔭にて感謝致しつゝ勤める事十六年半でありました。其の間に府立病院出身の看護婦諸姉が私を追ふて横浜の病院に勤務する事を希望して来られた人が、今尚外人に信用されて働き居られますは、皆我が母校の栄へを含んで居るかと思考して独り喜んで居ります。

前述前後した事をクドクド敷く愚書致しましたが、御免し下され。今茲に述べますのは、先生から御命じになりました、胸の佩用してある章に対する理由を大略致します。不明の所も御判じ下され。

明治三十七年、日露戦役の時に日本赤十字社神奈川県支部に数ヶ月赤十字の養生を受け、同年十一月出征して三十九年三月までなり。陸軍病院船初めの小雛丸の勤務は三十八年四月にロメラ丸へと転船の命を受け、十二班総員一同は馴れし小雛丸に悲しく送別されて、陸軍省の御命令に従ひ行き、ロメラ丸に三ヶ月間を経た其の時に、ロメラ丸の化粧の為め備後因ノ島ドックに行く間、看護婦一同救護班は宇品にて下船、広島の陸軍御用寄宿舎に休養して居りました。七月七日朝二時頃にロメラ丸はドックより宇品へ帰港の途中、数多の漁船が居るので汽笛を鳴らしても容易に去る事ならず、止むを得ず船長は本船進航の方向をヨコに変へ、似島附近にあるマナイタ岩礁に乗り上げ、ロメラ丸は大音響を発し同時に真っ二つと前後に折れ、三十分間にして船首と船尾とに別れて沈没した実に哀れなる姿となりましたが、乗組員には独りの負傷者なくして船長は大いに安心せられましたなれども、

御気の毒なるも六ヶ月間の免状取り上げとの罰を受けられました。

救護員は一同で様々噂して、最早戦終も近よりある事とて、解散なるもやと語り会ふ所へ、司令部から十二班は旧の小雛丸へ帰船してとの御命令に一同は大喜びで再び乗船しました。七月十日と云へば、其の年の非常に熱つく身の置き所なき日でありました。其の日司令部より樺太青森間の御命令にて、此れ亦大喜びで勇んで此の方へ向ひました。夏中の暑い時に涼しい航路、次で珍しき所へサガレン、アレキサンダー港、カムシャカ港へと三ヶ月間の勤務であり、他の病院船では近江丸が一航回のみ。我が小雛丸は終まで勤め、寒く氷のはつて航海困難の頃十月から再び宇品に帰り、満州、朝鮮、の航海となり、翌三十九年三月まで陸軍病院船中の最終の航海となり、翌三十九年三月まで陸軍病院船中の最終の上海勤務を無事で終りました。御承知の通り赤十字社病院船博愛、弘済、の二艘陸軍病院船二十艘で患者輸送、其の他軽傷者は御用船にて一ヶの船に三百五十余の患者を大多忙で輸送された中に、種々なる遭難にも遇ひました。到底筆紙に尽得られぬ場合もありましたが、最も心底から死を決して其の危険から免かれ奇蹟の如き事が二回ありました。一回はバルチック艦隊に出会して船長外人ゴーイン氏は非常なる術者で、全速力を以って大連港に逃げ込み、日本戦勝にて再び宇品へ帰りました。

他の一回は朝鮮沖にて大風の為め船は流され、流れ流れ行く間に夜半過ぎて一時の交代時、大波に依って暗礁に乗り上げ、傾斜は甚だしく歩行するに難き程なり。患者は満載、ボート降ろして避難するにも波は激しく、却って覆る恐れあり。時に船長と医長と御同道にて各病室へ廻はられ、救護員も一同各々受持室に白衣を着て看りしが、上長官の御命令に一同は本船に於いて死を決しられよとの事、此の御命令に傷病兵は一声を上げ嗚呼残念、戦地であればこそ。此処まで帰りて実に残念と申しました。私共は一同が代る代るに室に帰り、黒着と取り替へ、静かに一同は一言の言葉さへなく、受持ちの場に附き、御命令の下に患者と共に死を決しましたは三十八年十月二十二日夜半一時なり。其の時三十分を過ぎて傾きし船は水平となり、海水の浸入にて本船は沈み行くと思ひましたが、此れは又た一回襲ひ来た大波に依って、傾きし船が降ろされて斯く水平となりました。船長は運転士を率ひて船底に入り調査されましたれば、案外にも此れ天佑なるかな、何の障害もなく進行を試みられしに、無事でありました事を聞き取りし傷病兵は又た一声を上げて各自万歳を唱へました。次で船員は全身力を注ぎて宇品を示して帰りました。後日になりて洩れ聞き致しました事は、司令部の上官の御詞に女の身で斯くまで秩序正しく厳粛を護りて死を決したかと蔭で賞められ、又た一同に向って御賞めの言葉と同時に賞表した御言葉の書を頂きました。海上勤務と申しますれば、陸上勤務の白衣を着けた天使女の如き風情に反して、船に弱き者は船暈（せんうん）しつゝ、飲食を断ちてまでも其の業務を全ふしなければならぬ責任を帯び、他からは安楽と想像されたに、困難を忍ぶ事予想外でありました。我が十二班と申せば神奈川支部の本班なれども、救護看護婦不足にて、他の養生所を出でたる者に試験を行ひ、二十二人の一班を編成されまして、一人の婦長には我が同級生、故東たつ子姉あり、其の内へ小妹は加へられて出征致しましたが、一同は赤十字準備看護婦に劣らぬ様と一生懸命にて勤務に努力致しました。其の好成績を認められてか、二十二人が一人も残さず、一同に宝冠章勲八等を頂きました。三十九年の三月十九日解散式ありて後ち四日間休み、再び外人の病院へ勤める事、大正三年十一月の欧州戦役まで。

第二の出征。東京赤十字社仏国派遣、帝大外科塩田博士に率ゐられ、三年の十二月十六日出帆。長き航海に漸（ようや）く仏国のマルセーユに近づくと同時に危険の所を無事に抜け、安着の時を得ましたは翌年の二月初め。一同は内地と異なり困難は一方ならぬと覚悟の上、野戦勤務の準備して旅立ちしに、案外なる巴里で有名の第一名所ナポレオンの凱旋門在る十二方へ道ある星の場所（仏語にてエトワール）の一角に在

るシャンジエリヂエー通りに又た名高き独乙経営であつた大なるアストリア・ホテルが仏英両国の赤十字病院でありました。此処を我が日本赤十字社に与へられました（独乙カイゼル皇帝は戦勝の暁きに此処でシャンペイ杯を挙げる献立まで書いた活版小冊紙がありました）。一時は危険を極めました事数回。土曜日の夜十時過ぎれば仏兵の油断を射ひ、敵の飛行機及び爆裂弾飛行船に度び度び此の病院真上にまで襲われましたが、巴里市中一帯は真の暗みの夜の如く、灯火は一点もなく、病院内重症の用便ずるに小さな油の光り或は小さい蝋燭の光りで看護致しました。此の病院に勤務する事一ヶ年半にして東京赤十字社本社より帰国の命令ありて、残念ながら途中にして惜しまれつゝ巴里を引上げました。塩田医長次で茂木博士渡辺博士と此の三人の御手によりて如何なる名医（外人）も一歩譲り居りました。不足を申せば、日本看護には洋風は元より食事が不案内の者多く、為に二百余りの傷病者に甚だ不便を感じ、此のとき仏、英の貴婦人が率先して看護婦と成つて居られたので、食事手紙書満旦をお願ひして助けて頂きました。実に感じましたのは、宮様でも公、侯、伯、男爵位を保つた貴婦人方が率先して看護婦と成つて居られたので、食事手紙書万端を御願ひして助けて頂きました。実に感じましたのは、宮様でも公、侯、伯、男爵位を保つた貴婦人方が一兵士の為めに足洗ひまでしてやられました。而して其の言葉に、此の兵ありてこそ、と国の為めに働く兵よと大にいたはりてやられる其の風情を我が国人々に御覧に入れ度い様でありました。我が救護班員の引上げると同時に二人の婦長は患者直接の務めでなきゆへ学者に与へらるべき勲章、二十人の看護婦には看護に接したヲノーウル章を頂きて帰りました。後者は前者に優る物と聞き伝へ居ります。

仏国男爵夫人、此の病院の監督部長より再三手紙を頂き、再渡せよ大戦は今からだと申され電報まで頂き、幸ひに英国へ帰られる婦人ありて同伴を願ひ、日本政府のきびしき中から許可されて再び渡欧して救護の御手伝いを終り平和式まで再勤して、後一年間は賞与の為め諸所に静養として伴ひ行かれて、大正九年三月帰朝致しました。

仏、英、同盟の赤十字章を授けられて帰り、仏国政府の赤十字章も同じに頂きました。

◎写真の勲章。日本赤十字社特別社員章、日露従軍徽章、欧州戦役従軍徽章、仏国政府赤十字章、仏国ヲノーウル章、篤志看護婦章、日露戦役宝冠章勲八等、欧州役瑞宝章勲七等、日仏連合章、愛国婦人特別社員章。

ついでながら「助産看護之友」第四巻第九号（昭和七年三月）にある「同窓会期報」中の「永眠」項に、木下八重の略歴が令息俊雄氏談として掲載されていました。それを参考にして木下八重の略歴をまとめてみました。

木下八重の略歴（未定稿）

明治五年（一八七二年）十一月九日　京都府舞鶴町に生まれる（亀井峰太郎）

明治二一年？　数え十七歳で結婚して木下姓を名乗る。

明治二三年？　数え十九歳で長男木下俊夫出産

明治二六年？　数え二十三歳で二男臻出産

明治二七年？　数え二十四歳で夫と死別、夫の家を出る（子供のその後は未詳）

明治二七年（一八九四年）九月　満二十一歳十ヶ月で京都看病婦学校に入学　規則では満二十二歳に達していなければ入学できなかったところ、タルカット女子のはからいで入学を許可されたそれとは別に八重子に心臓病の疑があったので仮入学になったともある

明治二九年（一八九六年）六月　卒業　九月　産婆試験合格　九月十五日の福知山水害に際し、京都府の足立病院で三ヶ月勤務
明治三〇年（一八九七年）二月　京都府立療病院（京都府立医科大附属病院の前身）に勤務　その後新設の精神病室に配属され昭和三十三年六月まで二年半勤務
明治三三年（一九〇〇年）六月　外人向けの横浜一般病院に転職（以後中断を経て十六年年半勤務）
明治三七年（一九〇四年）十一月十八日　日露戦争に日赤神奈川支部の看護婦の一員として従軍　十二月十九日　第十二救護班に編入される　十二月二十六日　病院船小雛丸に乗船　同級生の東たつ子も婦長として勤務
明治三八年（一九〇五年）二月二十二日　ロヒラ丸に転船　七月七日　ロヒラ丸転覆により十日再び小雛丸に乗船　その間バルチック艦隊に遭遇したり朝鮮沖で船が座礁したりと危険な目に会う
明治三九年（一九〇六年）三月十一日　病院船勤務終了　宝冠章勲八等受章　三月二十四日　横浜一般病院に戻る
明治四二年　勤務中に右親指にバイ菌が入り切断
大正三年（一九一四年）十一月十一日　第一次世界大戦欧州従軍のため日本赤十字社本部に召集され佛国派遣救護班に編入　十二月十六日　伏見丸に乗り横浜から出帆
大正四年二月五日　パリ到着　十四日より日赤病院（サンゼリゼ通りのアストリアホテル）にて一年半従軍
大正五年六月三十日　救護活動終了　六月九日　フランスからヲノーウル章受章　七月十日　伏見丸にてパリ出帆　九月十三日　神戸に入港　途中京都により十五日に東京帰着
大正七年九月　フランス側の要請により再度渡仏して救護にあたる
大正九年（一九二〇年）三月　パリ講和会議後の静養を経て帰国
大正十一年（一九二二年）十一月九日　宝冠章勲七等受章　満五十歳の記念に写真撮影
大正十五年（一九二六年）　京都看病婦学校同窓会東京支部発足会に出席　集合写真
昭和二年（一九二七年）五月十八日　佐伯理一郎宛ての書簡を出す
昭和七年（一九三二年）一月十日　横浜一般病院で後輩の真島智茂に看取られる中永眠（享年五十九）

＊八重が誕生した明治五年十一月はまだ旧暦でした。その一ヵ月後に新暦に移行（明治五年十二月を明治六年一月に）しているので、八重の年齢換算はやや複雑になっています。本稿では、明治二十七年にまだ二十二歳になっていなかったことを根拠として換算しています。

［追記］
「助産之友」第三巻三号（大正四年八月）にも「ひとのかゝみ」中に佐伯理一郎が木下八重子について書いた記事があることがわかった。